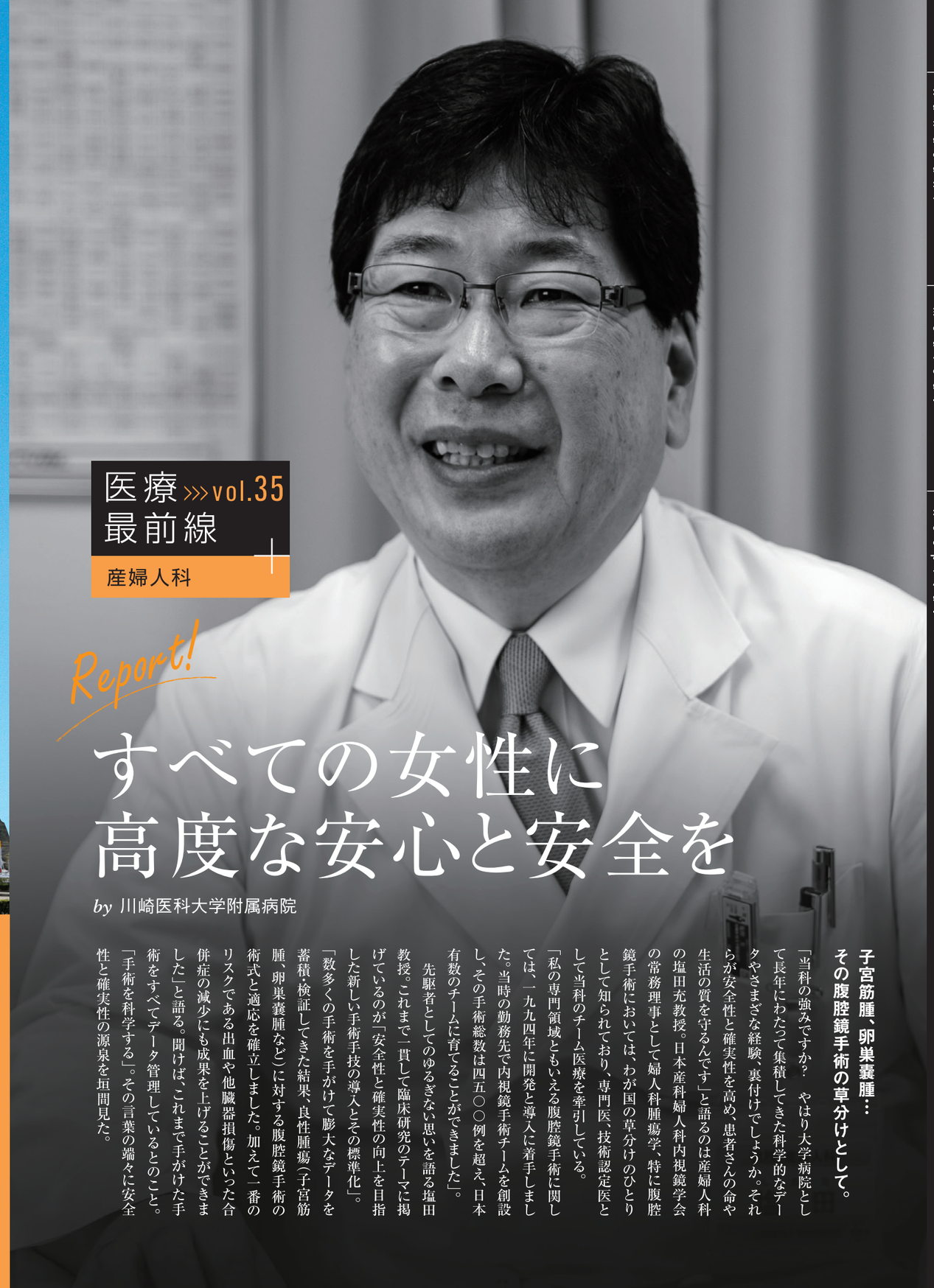


医療 >>> vol.35
最前線
産婦人科

Report!

すべての女性に高度な安心と安全を

by 川崎医科大学附属病院

子宮筋腫、卵巣嚢腫…その腹腔鏡手術の草分けとして。

「当科の強みですか？　やはり大学病院として長年にわたって集積してきた科学的なデータやさまざな経験、裏付けでしょうか。それらが安全性と確実性を高め、患者さんの命や生活の質を守るんです」と語るのは産婦人科の塩田充教授。日本産科婦人科内視鏡学会の常務理事として婦人科腫瘍学、特に腹腔鏡手術においては、わが国の草分けのひとりとして知られており、専門医、技術認定医として当科のチーム医療を牽引している。

「私の専門領域ともいえる腹腔鏡手術に関しては、一九九四年に開発と導入に着手しました。当時の勤務先で内視鏡手術チームを創設し、その手術総数は四五〇〇例を超え、日本有数のチームに育てることができました」。

先駆者としてのゆるぎない思いを語る塩田教授。これまで一貫して臨床研究のテーマに掲げているのが「安全性と確実性の向上を目指した新しい手術手技の導入とその標準化」。

「数多くの手術を手がけて膨大なデータを蓄積・検証してきた結果、良性腫瘍（子宮筋腫、卵巣嚢腫など）に対する腹腔鏡手術の術式と適応を確立しました。加えて一番のリスクである出血や他臓器損傷といった合併症の減少にも成果を上げることができました」と語る。聞けば、これまで手がけた手術をすべてデータ管理しているとのこと。

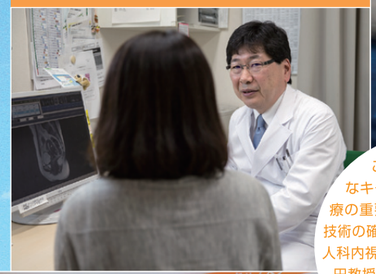
「手術を科学する」。その言葉の端々に安全性と確実性の源泉を垣間見た。

大阪府生まれ。大学時代から週1回のペースで続けていたテニス。現在は多忙のためお休み中。旅行が好きで学会なども含め、海外は30か国を訪れている。「海外で手術をしたこともあります」とも。留学のためフランスのリールに3か月滞在した時は、当地の病院に驚いたそうだ。「手術室のドアはウッド、壁や床も模様が施されていて、とにかく何もかもがお洒落でした」と笑顔で当時を懐かしむ。

塩田 充 教授
Mitsuru Shiota

■認定医・専門医・指導医
日本産科婦人科学会専門医、日本婦人科腫瘍学会専門医、日本臨床細胞学会細胞診専門医、日本産科婦人科内視鏡学会技術認定医、母体保護法指定医
■専門分野
婦人科腫瘍、内視鏡手術

手術終了後の内視鏡手術チームの医師。ほっとした笑顔を見せる。



これまでの豊富なキャリアからチーム医療の重要性を知る塩田教授。技術の確かさを示す日本産科婦人科内視鏡学会技術認定医の塩田教授、三宅医長を中心に看護師・臨床工学技士らがタッグを組んでいる。

当院の産婦人科は、各分野の専門資格を有する医師、スタッフが連携しながら治療に取り組んでいる。塩田教授は内視鏡手術、低侵襲手術など、婦人科のさらなる充実を図るため、2013年9月に創設された川崎医科大学婦人科腫瘍学教室を主宰。人材育成にも力を注いでいる。

患者さんのよき相談相手として安全・正確な医療を提供する。

婦人科特有の疾患に対して成果を上げる腹腔鏡手術。今では臨床技術を駆使することにより、婦人科良性腫瘍手術での開腹率は一〇パーセント以下まで減少した。つまり、一〇人中九人が開腹することなく、内視鏡による手術で救われている。

「傷が小さく、社会復帰も早い腹腔鏡手術は、女性には欠くことのできない手術法です。特に思春期の患者さんが傷跡で後々、辛い思いをしなくて済むよう、手術のクオリティを上げていくよう心がけています」。

今後は、健康保険適用などの事情から導入が遅れていた婦人科悪性腫瘍における腹腔鏡手術においてもリードしていきたいと考える塩田教授。「いずれ婦人科においてはすべての手術が内視鏡で行なわれる時代がやってきます。低侵襲手術を求めて患者さんが病院を選ぶ時代がすでに到来しています」とも言う。

最後に医師としての心得を聞いてみた。

「誰も手術を受けたいとは思っていません。でもその選択肢しかない場合、医師はよき相談相手として最善の医療を安全で正確に提供する使命があります。内視鏡手術もさらに創意と工夫が必要。そのためにも安全の裏付けとなるデータが重要なんです」。ひと言ひと言に第一人者としての使命感と優しい人がらがにじみ出ていた。

お問合せ
川崎医科大学附属病院
☎086-462-1111
http://www.kawasaki-m.ac.jp/hospital/